MD Anderson Cancer Center での留学生活

福田 泰也（平成 22 年卒）

私は 2019 年 4 月に渡米し、カリフォルニア州サンディエゴにある企業関連の研究室で留学生活を開始しましたが、同年 10 月に現在の所属先である MD Anderson Cancer Center, Department of Melanoma Medical Oncology へ異動しました。MD Anderson Cancer Center はテキサス州最大の都市であるヒューストンの中でも特に多くの医療機関や研究施設がひしめく TMC（Texas Medical Center）地区にある米国屈指のがんセンターです。

私が所属する Grimm Lab（直接指導者は Prof. Suhendan Ekmekcioglu）は主にメラノーマの進展や腫瘍微小環境における inflammatory pathway の役割について研究を行っている研究室です。私の仕事の一つは、癌免疫療法を行ったメラノーマ患者の TMA を用いて Multiplex IHC と Mass Cytometry（CyTOF）の技術を融合することで、免疫療法の効果判定や再発に実用的ないくつかの炎症性マーカーを含む panel を作成し、解析することです。その他は研究室の意向に沿う研究プロジェクトを自分で考えて遂行するように指示されており、メラノーマの腫瘍微小環境における可溶性 CD74 の意義を解析しようと日々実験プランを摸索しています。ポスドクは research training の立場ではありますが、ラボの被雇用者としてラボの発展のために自主的、自立的な研究プランを提唱し、遂行することを求められており、私自身も適度に緊張感のある研究生活が送れているのではないかと考えています。

私の所属する研究室は、現在ポスドクは私一人で、ラボメンバーも多くはありませんが、その分メンバー同士の関係が濃密かつ親切で、自分が行ったことがない実験内容については丁寧に教えてもらえますし、メンバー全員が異なる国籍の研究者とあって日常会話も楽しみの一つになっています。また、周囲のラボとのネットワークはしっかりしており、自主的に提案すれば大抵の実験は行えますし、bioinformatics を専門にしている研究者もいるため、CCLE や TCGA といったがんゲノムデータベースも簡易に利用できる環境にあります。

最初に述べました通り、私は渡米後に留学先を変更するという貴重な経験をしました。今後、留学先を自ら摸索しようと考えられている先生方へは、必ず研究室に訪れて指導者やラボメンバーと話をすることで生の雰囲気を感じとること、どのような研究環境かを事前に自分の目で確かめることをお勧めいたします。スカイプ面談だけでは分からない研究室の生の雰囲気を感じることは納得のいく留学生活を送る上で大変重要だと感じました。

最後に、米国留学の機会を与えて頂くとともに留学先変更に際して親身に相談に乗って頂きました土岐祐一郎教授、江口英利教授には心より感謝申し上げます。

ラボメンバーと昼食